人の声，——特に何気なく行われている会話のやり取りなど——は，再生の最も困難な課題だと言えば，ふしぎに思われる方も多いでしょう。ところが，周波数帯域をひろげ，歪を減らそうとして，スピーカーやアンプをマルチ（多重方式）にさせ，プログラム・ソースのチャネル数を1（モノーラル）から2（ステレオ）に増し，さらに4チャネルなどと表面的な効果音だけを求めようとすると，人の声など，だれの声なのか，その唯一無二の個性が抹殺されがちです。電話など狭帯域の再生だと，かえって個性が判別できるという事実は，いわゆる《高忠実度再生》が，世間なみの考え方では道遠しであることの証明になりましょう。

SR－Xでは，堂を圧するパロック・オルガンのペダル低音やバス・ドラムの衝撃的低音から，ジェット機の尾を引く鋭い爆音，あるいは草の葉にすだく虫の音まで，すべて自然に再生するだけの分解能を示しますが，それは周波数帯域の広さだけでなく，過渡現象を生ぜず，混変調歪を受付けず，さらに，正体を捕えにくい位相歪を除去する方策が取られているためです。

特に《位相歪》という厄介ものは，リスニング・ルームという大きい空間に音を放射したり，スピーカーをマルチ・ウェイにすると，避けることのできない歪です。ヘッドフォンにすれば，この点たいへん有利になることは言うまでもありませんが，特にSR－Xのように，単一振動系から再生して，発音体と耳との間に余分なキャビティ（空室）を作らない構造では，位相歪についても，ほとんど問題を生じないのです。ですから，スピーカーやヘッドフォンにありがちなエコーの掛ったような感じは全然なく，音の粒子がクッキリ，音の定位がハッキリします。

たとえば，楽器の合奏を聴いてみると，楽器同志がくっついたりせず，その一個々々がよく判別でき，ふつうでは判別困難な低音楽器もそれぞれの個性が明確にわかります。人声の合唱でも，何人ぐらいで歌っているかということだけでなく，個々のパートの声質のちがいまで判別できるキメのこまやかさですから，疲れず，飽きがきません。

3 臨場感が抜群

臨場感という言葉は，いざ定義しようとすると中々むずかしい問題ですが，要するに，“そこでスピーカーが鳴っている”という人工的作為を意識させず，ひとつの音場のなかに自分がいる——という自然な安心感といえましょう。

SR－Xのように，情報量が多く，分解能が良く，歪感が皆無で，音のバランスが自然だ，というようなものでは，マイクロフォンが捕えたそのままの雰囲気をみごとに再生できるのです。特に，人間の耳が捕えるのと同じ様式のワン・ポイント・マイクロフォン——たとえばA.Charlinの録音方式など——によるディスク或はテープをSR－Xでお聴きください。そのとき初めて，臨場感の意味がおわかりになりましょう。

# ★SR－Xの使い方

SR－Xの使い方は2通りあります。その1は専用アンプによる方法，その2はふつうのステレオ・アンプにアダプターを接続する方法です。

1 SR－Xは，ふつうのヘッドフォンやスピーカーにくらべ，インピーダンスが非常に高いので，真空管のプレート回路（プッシュ・プル）から直接に出力を取ること(OTL)ができます。この方式の専用プリメイン・アンプにSRA－3Sがあり，SR－Xをこれで聴くと，きわめて透明な音質を得られます。

2 SR－Xを，ふつうのステレオ・アンプでお聴きになるときは，アダプターSRD－5をアンプのスピーカー端子につなぎ，その前面パネルのコンセントに，SR－Xのプラグを差込みます。アンプはできるだけ高性能のものをおえらびください。

SR－Xは，ステレオ・アンプのヘッドフォン・ジャック，プリアンプ，チューナー，テープ・レコーダーに，直接つなぐことはできません。必らず，1又は2の使い方をしてください。

SR－Xは，コード全長2.4mですが，アンプ又はアダプターから離れて聴くときには，低容量の延長コードSRE－14(4m)をご利用ください。これに増設用コンセントSRE－B2を併用すれば，SR－Xを2組差し込めます。

SR－Xの専用アンプをご自作のときは，6極コンセントSRCをお使いください。なお，自作されるときはSRA－3Sの回路はむづかしいので，真空管だけで構成したOTLアンプを設計してください。ご希望の方には，回路設計例をお送りします。